

千秋文庫「増上寺絵図」の世界

一、成立年代の推定

増上寺台徳院御霊廟に諸大名から献納された灯籠については『東京市史稿市街篇』に掲載された台徳院別当寺恵眼院、宝松院による『台徳院御霊屋献備御燈籠記』が知られており、ほぼ献納大名の全容を掴むことが出来る。しかし、この記録からは具体的な灯籠の配置を推定することは出来ず、残されている写真資料からの比定も困難であった。

幸い昨年の春小平の郷土史家田中義信氏より、九段下の千秋文庫に増上寺の絵図が展示されており、台徳院の灯籠の配置図が記載されているとの情報を頂いた。早速千秋文庫を訪れたが、残念ながら展示は終了しており、大きな絵図なので展観は不可能とのことであった。一年後に再展示の予定が有ることと、今年正月明けを待つて再び同館を訪ね目当ての「増上寺絵図」を見ることが出来た。絵図の大きさは展示後の実測により232×186cmと確認されたが、正面の展示ウィンドウ一杯の大絵図であった。

「千秋文庫は旧秋田藩主の佐竹家に伝わる数多くの貴重な文化資料を一堂に集めた博物館」で、大名家に伝わる極めて質の高い史料を年数回の特別展を通じて紹介している。幸い学芸員の金森さんのご好意により、数度に亘り写真撮影をお許し頂き、絵図の細部にわたって検証を行うことが出来た。

下に絵図（以降千秋文庫絵図）の合成画像を掲載したのでまず全体を概観していただきたい。

絵図が描かれている範囲は、現在の増上寺の三解脱門を中心に左手、いわゆる南霊屋と言われる部分である。中央に台徳院（秀忠）御霊屋、並ぶ様に右手に崇源院（お江与、秀忠夫人）の霊牌所、左手奥に台徳院宝塔覆屋、その下に安国殿、右手中央に本堂、その下に三解脱門が見える。

中央、台徳院御霊屋前から惣門（現存）まで、台徳院宝塔へ至る部分に石灯籠、金灯籠が色分けして描かれ、余白にびっしりと献納大名の名前が記載されている。

詳細は後に見るが、絵図全体に建物周辺の大きさ、建物と建物の間隔を示

す数値が記載されており、極めて精密でしかも実用性の高い絵図と言える。この様な絵図が、何時何の目的で作成されたかが問題となる。

次頁の地図を見ていただきたい、明治十七年の地図を元に増上寺の全体像を示した物だが、黒枠で囲んでいるのが千秋文庫絵図の表示範囲である。地図には三解脱門を挟んで右手に六代將軍家宣、七代將軍家継をはじめとする五人の將軍を祀る北霊屋が見えるがこれは表示範囲の外になる。絵図表示範囲の中で大きな違いが有るのは台徳院御霊屋の上側に位置する清揚院御霊屋



図1 享保年間による彩色大絵図（千秋文庫絵図）（合成写真）

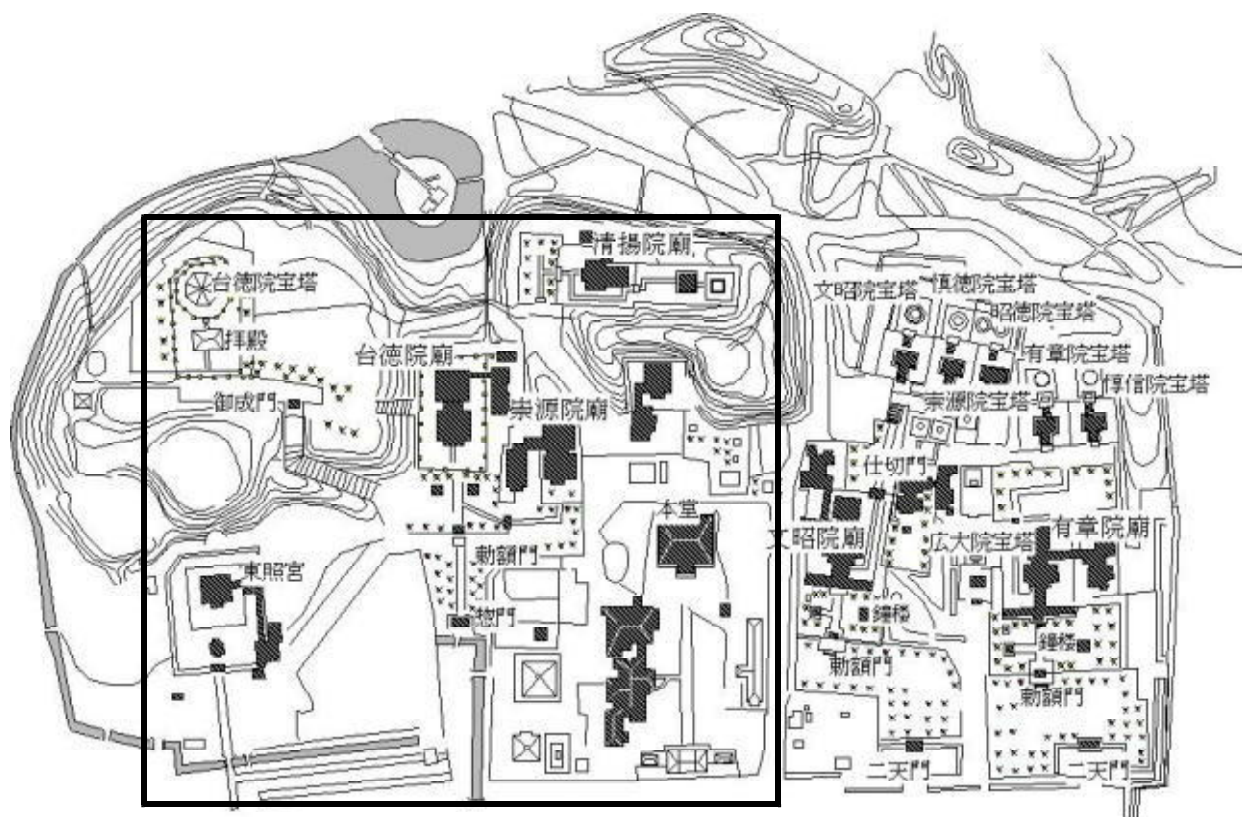


図2 明治17年頃増上寺概観図（黒枠は千秋文庫絵図表示範囲）

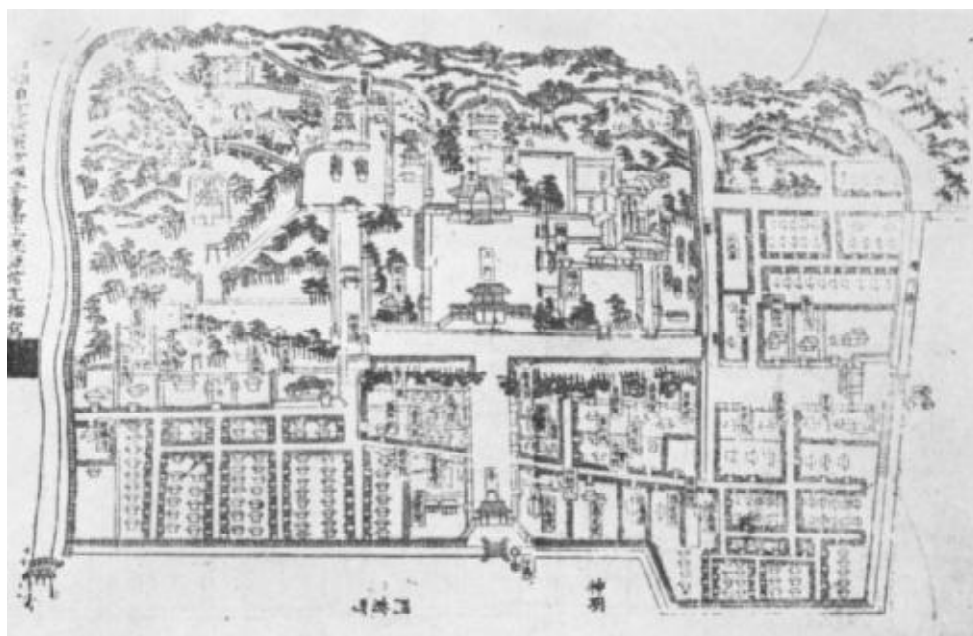


図3 貞享丙寅古子寄図(「三縁山志」所収)

である。清揚院徳川綱重の霊廟は宝永二年（一七〇五年）に伝通院から改葬されて造営される。
因みに北霊屋が出来上がるのは正徳二年（一七一二年）の文昭院御霊屋、正徳六年（一七一六年）の有章院御霊屋の成立以降の事になる。
清揚院霊廟へは崇源院霊牌所と本堂の間に出来る参道を登って行くことになるが、千秋文庫絵図にはこの記述は無い。

従って千秋文庫絵図は、宝永二年以前の状態を表示していると考えることが出来る。しかも増上寺の山側を仕切る柵の配置、建物の配置は、摂門の『三縁山志』に残されている五葉の古図のうち「貞享丙寅古子寄図」（一六八六年）に極めて近いことがわかる。
建物の配置を見ていくことにする。
「貞享丙寅古子寄図」の中では本堂の後ろに二棟の建物が配置されているが、本堂の裏手が太子堂、その後ろが経蔵である。

一方千秋文庫絵図では、本堂の裏手には「護国殿御供所」その裏手は「護国殿」が配置されているが、実はこれは貼り紙による修正部分で、「護国殿」の部分には「御経堂」と書かれている。

現存の経蔵は三門左手の開山堂の上に移っており『三縁山志』によれば経蔵は

慶長十巳御健立其後天和元酉年十二月再御改造移地（此後数度御修復有之今略之）

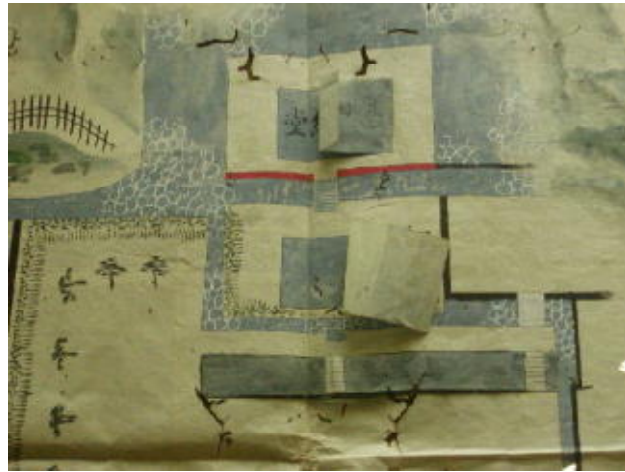


図4 「御経堂」貼り紙部分

と有るので千秋文庫絵図は天和元年（一六八一年）以前の状況を描いていることになる。

護国殿が引き移って来るのは宝暦十二年（一七六二年）のことである。

一方、本堂と経蔵の間の太子堂は『三縁山志』に「今護国殿御供所となる」とある。千秋文庫のこの部分の貼り紙下には何も記載されていない。

千秋文庫絵図は少なくとも「貞享丙寅古子寄図」の時代の絵図を下敷きに最初の図面を描いていると考えて間違いない。

次に絵図左下の子院群の配置を見てみよう
図中には

安立院（元和三年一六一七年）安国殿别当寺
最勝院（寛永三年一六二六年）崇源院别当寺
宝松院（寛永九年一六三二年）台徳院别当寺
惠眼院（寛永九年一六三二年）台徳院别当寺
の四寺院が描かれているが惠眼院の右隣の
佛心院（宝永二年一七〇五年）

は描かれていない。佛心院は桂昌院（綱吉生母）の御霊屋の别当寺として成立するから、同時期に造営された清揚院御霊廟が描かれていない図に記載が無いのは当然といえる。

以上の諸事実から、千秋文庫絵図の成立の下限を天和元年（一六八一年）以前と考えておきたい。

次に記載された情報から上限年代を追っていくことにする。
千秋文庫絵図には台徳院霊廟に奉献された石灯籠の配置と奉献大名名が記載されているが、銘文まで記載しているわけではない。
今現存する台徳院殿に奉献された燈籠の銘を見てみれば次のようになる。

① (上竿) 石燈籠奉拜進 台徳院殿 尊前 寛永九年七月廿四日 (下竿) 酒井讃岐守源朝臣忠勝	② (上竿) 奉献 石燈籠貳箇 台徳院殿 尊前 慶安四年辛卯 七月日 (下竿) 從四位下有馬中務少輔 源朝臣忠頼
--	---

台徳院灯籠銘文

①は増上寺に残されている灯籠の銘文で、多くの灯籠はほぼこの形式をとる。

②は茅ヶ崎市の海前寺に移された灯籠の銘文で、後に献納されたことが判る。日付は七月 日で廿四日とは刻まれていない。

幸い前述の『東京市史稿市街篇』の『台徳院御霊屋献備御燈籠記』には献納大名名と併せて日付他の銘文も記載しているのでそれによって内容を確認していこう。

掲載されている銅灯籠、石灯籠は殆ど寛永九年七月二十四日の銘であるが中に

慶安四卯年七月二十四日（一六五一年）

從四位下有馬中務少輔源朝臣忠頼

承応二癸巳年正月二十四日（一六五三年）

會津城主從四位上左少將藤原朝臣正之

明暦二年申九月二十四日（一六五六年）

從四品左少將兼雅樂頭源姓酒井氏忠清

寛文四年甲辰七月二十四日（一六六四年）

小田原侍從四品稻葉美濃守越智正則

又五重石灯籠として

承応二癸巳年正月二十四日（一六五三年）

淀城主從四位下永井信濃守大江尚政



図5 台徳院宝塔覆屋

が記されている。

今、會津城主從四位上左少將藤原朝臣正之の灯籠を例にとってその灯籠配置と甲乙丙丁の付番を見て見よう。図5、6から判る様に配置にも付番にも大きな乱れはないから、後から書き加えられた物ではなく献納後の状態を描いているのは間違いが無い。

もう一つ絵図に記載された情報を追っていきう。下の図は台徳院宝塔覆屋前の部分で図5の下の部分にあたる。

覆屋石段下左脇には大きな木が描かれ

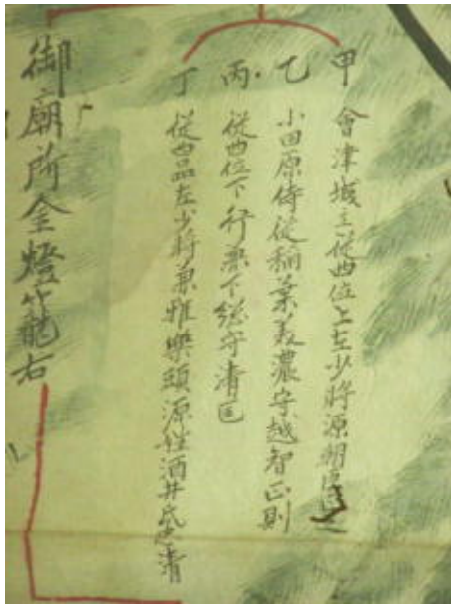


図6 奉獻大名名



図7 台徳院宝塔覆屋前

土井兵庫頭上之の記述がある。

下側の桜の絵には

シダレ桜

内藤外記上之

また図にはないが右の並びに

モチの木

喜多見五郎左衛門上之の記述が見られる。

土井兵庫に關しては『嚴有院御実紀』の明暦二年（一六五六年）十月七日の条に

○七日三縁山 台徳院

殿靈廟修理の助役を土井兵庫頭利長命ぜられ。作事奉

行八木但馬守直その事にあづかるべしと仰せ付けらる。

また内藤外記正重は『東武実録』寛政九年七月二十五日に

台徳院殿ノ御堂御廟所御造宮ノ奉行是ヲ相勤ルニ依テ也内藤外記正重高木筑後守家政二人モ賜モノアリ是ハ今度 御廟所御番仰付ラレ増上寺ニ相詰ルニ依テ也

喜多見五郎左衛門重恒は『嚴有院御実紀』承応三年八月廿六日に

三縁山 靈廟修理助役せし松平丹波守光重。并に普請奉行せし書院番喜多見重俊「恒ト」。一尾伊織通尚拝謁し奉る。

と有り、いずれも台徳院靈廟の造営・修復に携わった者であることがわかる。内藤外記が植えた桜は図3の「貞享丙寅古子寄図」にも「古桜」として記載されている。

千秋文庫絵図には、このほかにも文献に見られない記述が多く見られ、絵図の制作者の位置を推測させるものがある。

次は崇源院靈牌所の辺りを見てみよう。崇源院靈牌所の左右にはまず若狭

侍従酒井忠勝が寛永十五年九月十五日、即ち崇源院の十三回忌の法要を前に

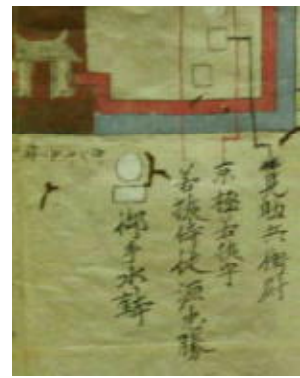


図8 崇源院靈牌所右

寄進した金灯籠が置かれ（香取秀真『江戸鑄師銘譜』の銘文による）、お江与の方の姉お初の方の婚家京極若狭守（高政或いは忠高力）の石灯籠が並ぶ中に奉納物は明らかではないが

左に 寛助兵衛尉

右に 松田六郎左右門

の名が見える。



図9 崇源院靈牌所左

『東武実録』によれば二名共に寛永九年の台徳院崩御時には奥方御番に名を連ねている。寛永三年に没した崇源院の霊牌所は寛永五年に上棟するが、正保四年（一六四七年）には造替されており、こ

の二名の奉納物がいずれの時点で献納されたのかは明らかでない。

もう一つの例は台徳院御霊屋前左右に植えられた榎の木に添えられた記述である。左右共に

本多下総守上之

とあるが上図右には更に

細字で



図10 台徳院御霊屋前

枯テ後曲淵清蔵上之

と書かれ更に榎の木の下に小さく

享保年中枯ル

との書き込みがある。

本多下総守俊次は三河西尾藩主。曲淵清蔵は『東武実録』寛永九年の条には西之丸御花畠二番に名を連ねている。『寛政重修諸家譜』では「寛政八年

四月十日土圭間の番士となり、正保三年正月二十二日御具足奉行にうつる。」とある。「土圭の間」は中奥の「時計の間」に当たり曲淵清蔵が將軍の私生活の場である中奥に籍を置いていたことは判るが、特に榎の木を献上出来る立場に有ったとは思われない。今少し考察を要する。

いずれにしても、記載された事実が台徳院御霊廟の成立からそれ程経過していない時期に係わることは注目して良いと思われる。これらの絵図に記載された事項が絵図の作成者の周辺の記憶或いは記録の中にあり、同時にその事項を書き入れる事が意味を持っていた時期にこの絵図が製作されたと考えて良い。

さて絵図の成立時期を確定する上で問題となるのが、絵図の中二箇所に記載されている「享保」の文字である。学芸員の金森さんの調査により古い目録には千秋文庫絵図は「享保年間による彩色大絵図」とあることがわかった。となると成立時期は正徳年間を下る享保年間（一七一六〜一七三六年）になるのだろうか。

左図を見て貰いたい。台徳院の別当寺「宝松院」と「恵眼院」の間に



図11 千秋文庫絵図左下



拡大図

「下御供所」が描かれていたが縦に細字で古此処二有之と書かれ、下には

享保年中

恵眼院ノ後へ

移ル

と書き入れが有る。もしこの図が享保年中に描かれたのであれば、その時点では存在しない「下御供所」をわざわざ注釈まで入れて描き入れる必然性は無い様に思われる。同じ事は前述の「享保年中枯ル」の書き込みにも言える。注記そのものは「享保」を下る時期に書き込まれたことは事実であり、おそらく絵図の名称もそこから付けられたものと思

われるが、千秋文庫絵図の成立年代がこの書き入れによって左右される物ではないことは明らかである。

以上の考察から千秋文庫絵図の成立の上限は稲葉美濃守正則が金灯籠を献納した寛文四年（一六六四年）を下る時期と考えて良いであろう。

二、制作者の推定

次にこの千秋文庫絵図が誰によって何の目的を以て描かれたかを考えてみたい。私を感動させ、釘付けにした灯籠の奉献大名名の書き込みは勿論のこと、この絵図を細部まで検証していくと様々なデータが含まれており、このデータを管理し必要とする人物達の姿が自ずと浮き上がってくる様子がしてくる。結論を急ぐ前に、事実の断片を提示して考察を進めて行くことにしたい。



図1 2 台徳院御霊屋前灯籠配置図

何より
もまず、
絵図全体
に書き込
まれた諸
大名の名
前と、灯
籠の詳細
な配置位
置の表示
を考えれ
ば、千秋
文庫絵図
が灯籠そ
のものの
維持管理を意図していることは間違いない。いささか幼稚な記載間違え、例えば毛利攝津守を森撰津守と記載するような誤りを除けば、全体としては極めて正確な記述となっている。だが、もし灯籠を管理するだけならば不要な

記述が余りにも多いのも事実である。

例えば図13に示す台徳院御霊屋の内部に書き込まれた数字は何を意味するのであろうか。絵図中に何方所かにわたって見られる、書き入れを促す朱の括弧書きは、管理を目的として詳細な数値の把握を促す指示とは受け取れないであろうか。またそのような数値を測定し図に表示しうる人間とは誰なのだろうか？また、先に紹介した樹木の植え込みに関する情報を把握し、書き込み得る立場に居たのは誰なのだろうか。



図1 3 台徳院御霊屋周辺

一体、そのような情報を誰が必要としたのであろうか。
この問いに
対する回答
は、絵図を所
持した人物が
判っている現
在それ程難し
いことでは無
いように思わ
れる。

千秋文庫は
秋田藩佐竹家
の収蔵する史料であり、どの時代にか秋田藩がこれらの史料の取得に努めたことは間違いがない。しかも秋田藩はこれらの史料の入手には格好の位置にいたのである。

先に紹介した別当寺をはじめとするいわゆる増上寺子院群は、増上寺に参

詣する大名の宿坊としても割り当てられていた。年忌の法要は勿論、祥月命日の代参の為に、宿坊としての子院は欠かせない存在であり、火事の多い江戸の中で、火消しの任を負った各大名家にとっても、増上寺の警衛に当たることは、絶好の働きの場であった。

佐竹家が宿坊としていたのは、台徳院別当寺の一つ宝松院で、宝松院、恵願院は『台徳院御霊屋献備御燈籠記』の報告者でもある。おそらくこの千秋院絵図の原図もこの二院によって作製され、宿坊としての縁で佐竹家側が写し取る機会があった物と思われる。

勿論佐竹家にとってもこの様な詳細な絵図面を入手することにはリスクがあった筈であり、佐竹家が作事奉行の助役などで増上寺の修復に携わった時期が有ったものと思われる。

三、灯籠配置図が語るもの

いよいよ灯籠の配置について語る時がきた。まず私達は何度も話題として取り上げた『台徳院御霊屋献備御燈籠記』について考えてみる必要がある。

『台徳院御霊屋献備御燈籠記』は『東京市史稿市街篇』に掲載されているが、写本は国会図書館に有り、内容には若干の差違が見られる。

『台徳院御霊屋献備御燈籠記』の記述が今日貴重だと思われるのは、石灯籠だけでなく台徳院御霊屋内、奥院宝塔覆屋内の釣灯籠、今では焼失ないし散逸してしまった各種の石造物に書き込まれた銘や詞書きが記載されていることである。

今『台徳院御霊屋献備御燈籠記』と千秋文庫絵図を付き合わせてみると『台徳院御霊屋献備御燈籠記』だけでは見えなかったいくつかの事実と、欠落部分が見えてくる。

『台徳院御霊屋献備御燈籠記』の記述はおそらく御霊屋内と思われる釣灯籠から始まり、拝殿正面左右の金灯籠、崇源院側の石灯籠から水盤舎の有る勅額門内の内庭を時計回りに記述していく。次いで勅額門前から僧門までの右手二列、左手二列に及ぶ。次に今度は奥院宝塔覆屋内の釣灯籠から始まり覆屋前内庭の金灯籠群、柵外右手、柵外左手の石灯籠、宝塔覆屋石段下から埋御門までの左側二列、次いで埋御門から台徳院御霊屋までの左手、右

手と順に記述し、細川三斎の左右の石灯籠で終わっている。おそらく後のものと思われる乱れはあっても極めて分かり易い記述の仕方である。

次に差違の部分について考えてみたい。

- | | |
|-----------------|--------------------------------------|
| ① ② 小出大和守藤原吉英 | 元禄九年十月英及の代に慶安元年無嗣断絶 |
| ③ 溝口伊豆守善勝 | 貞享四年八月政親の代に罪を得て断絶。 |
| ④ ⑤ 浅野采女正源長重 | 元禄十四年三月長矩の代に刃傷により断絶 |
| ⑥ ⑦ 黒田東市正源高政 | 延宝五年二月長寛の代に宗家を継ぐにより絶家 |
| ⑧ 本多因幡守源利長 | 寛永十四年七月無嗣断絶 |
| ⑨ 稲葉淡路守紀通 | 慶安元年謀反の罪で自害 |
| ⑩ 那須美濃守藤原資重 | 寛永十九年七月無嗣断絶 |
| ⑪ 桑山左衛門佐藤原一直 | 天和二年五月一尹の代に不届の事有りて断絶 |
| ⑫ 佐久間大膳亮平勝之 | 元禄元年五月薨 ⑫の代に丹羽長次にお預け |
| ⑬ 片桐出雲守孝利 | 元禄七年二月貞就の代に無嗣断絶 |
| ⑭ 竹中采女正藤原重真 | 寛永十一年二月切腹断絶 |
| ⑮ 松倉長門守藤原重次 | 寛永十五年七月国政に不正有るにより切腹。 |
| ⑯ 古田兵部少輔藤原重恒 | 慶安元年無嗣断絶 |
| ⑰ 宮城主膳正大江豊嗣 | 承応二年十一月無嗣断絶 |
| ⑱ ⑲ 本多飛騨守藤原朝臣成重 | 元禄八年三月重益の代に所領を没収。
後許されて采地二千石寄合に列す |
| ⑳ ㉑ 北條出羽守氏重 | 万治元年十二月無嗣断絶 |
| ㉒ 酒井（金森）山城守重澄 | 寛永十年水野勝成にお預け後改易 |
- 実はこの十七名の大名と二十二基の灯籠は『台徳院御霊屋献備御燈籠記』には記載されていない。丸数字は付図の灯籠配置図の位置を示している。大名の下には共通点を記したが、理由は各家断絶によるものと考えられる。
- お家断絶した大名の灯籠がどうなったかは、実は興味有るところだが、灯籠が灯籠としての形態を保っている限り排除されたことは無いようだ。増上寺の例ではないが、東叡山寛永寺の厳有院廟に献納された浅野内匠頭長矩の石灯籠は戦後移されて総持寺に在ることが判っている。ではこれらの断絶大名の灯籠はどういう運命を辿ってしまったのか。

	総数	倒落セル箇數	倒落セサル箇數
芝区増上寺内七代將軍靈屋	青銅灯籠 一三七	三二	一〇五
同	石灯籠 四一四	三六九	四五
同	六代將軍靈屋 同	二二八	一八五
同	同	二二八	四三
同	南 靈 屋 同	一九	一七
同	同	一九	二
同	台 徳 院 同	五八	五一
			七

これは関東大震災後の大正十四年に農商務省が出した『関東地震調査報告書』の一節である。灯籠はその倒落した方向から地震の力の方向が判るらしくかなり綿密な調査がされている。問題は台徳院靈廟に残されていた灯籠の数である。総数で五十八基である。金灯籠については香取秀真が大正三年に出した『日本鑄工史稿』の中の「江戸鑄物師の話」に

其後芝へ行って二代將軍廟の邊を彼方此方捜して見ると、大分石の土臺が残って居りますが、其土臺の上に確かに金燈籠が載って居った形跡がございます。増上寺に就て聞くと、泥坊に取られて仕方が無いから物置に入れたったという事であります。物置へ行つて見ると、丁度太い丸太を積んだやうに井桁に組んで、天井裏へ届く程沢山の胴筒が積んである。笠は笠、臺は臺で積んである。少なく見積もつても二十本位は藏つてあります。

と有るので、実に多くの石灯籠が失われていることが判る。しかし金灯籠はともかくこの時代に石灯籠をわざわざ盗んでいく人はなく、大方は江戸時代を通じてたびたび起こった地震により倒落し取り片付けられてしまった様だ。

南部藩の『江戸一ヶ年御入用調』には

一、三十五両
両山御靈屋え御備之御燈籠御修覆御入方

の記述が見られるが、増上寺・寛永寺に奉献した燈籠を維持していくために各藩が費用と労力を費やしていたかという一端を示している様に思われ

る。

維持管理の為の費用を負担する大名家を取りつぶされれば、地震で倒落した灯籠は、そのまま片隅に取り片付けられるしかなかったであろう。

『台徳院御靈屋献備御燈籠記』が千秋文庫絵図の内容に対して欠落と記述の乱れを持っているのは、この事実を反映しているものと思われる。おそらく『台徳院御靈屋献備御燈籠記』は千秋文庫絵図よりはかなり後年の書き上げによるものと推測できる。

四、おわりに

千秋文庫絵図の発見により私達は実に多くの事実を解明することが出来るようになった。図14を見ていただきたい。勅額門内側、丁字門の辺りから



図14 台徳院御靈屋前 右水盤舎

台徳院御靈屋前を見た所である。後に取り片付けられてしまう金灯籠が見える。私は従来上野の東照宮の拝殿中門前の金灯籠が御三家のものであることから、この金灯籠が御三家の灯籠であると思ひこんでいた。

千秋文庫絵図の記載によればこれらの金灯籠は右から

安藝侍從源長成

上杉弾正少弼藤原定勝

仙台中納言藤原政宗

がそれぞれ二基づつ献納したものであることが判った。

次に図15は左水盤舎の辺りから丁字門を望んだ写真で勅額門の内側の情景がよく分かる。

ここでも配置されている灯籠の献納主が明確となった。

この様に今までは灯籠を配した風景写真でしかなかったものが、献納主まで判る史料映像と成ったのである。

もう一つ崇源院靈牌所前の灯籠について私は形から寛永のものではないに



図 16 崇源院霊牌所前

最期に、数度に亘る写真撮影と、不躱な質問に丁寧にご回答いただき、また写真資料の掲載を快諾頂いた千秋文庫と同館学芸員の金森さんに心からなる謝辞を呈したいと思います。

残念ながら建物群の変遷について多くを語る立場にはないが、千秋文庫絵図に記載された詳細な建物情報は増上寺の建物に関する全体像を復元していくための極めて重要な資料と成ることは間違いない。

戦後米軍が撮影した航空写真には焼失した崇源院霊牌所の前に上図の写真通りに石灯籠が並んでいるのが見える。残念ながらこの石灯籠は未だ発見されてはいない。



図 15 左水盤舎から丁字門を望む

しても正徳、享保位のものと考えていた。しかし今回千秋文庫絵図に記述が見られないことから、改めて調べてみると、天野俊一博士が「石灯籠」の中で「同じ石燈群でも、勅額門の前を右に曲がった崇源院殿拝殿前の広場のは、天保だが型が揃っているのと、行儀良く並んでいるのとでよろしい（昭和八年一月十四日）」と有るのに気づいた。これらの灯籠はどうやら天保時代に崇源院廟に献納された物であることが判明した。千秋文庫絵図に記述が無いわけである。